

祝允明と佛教

間野 潜龍

祝允明は、中國の書家として著名な人物であり、明代の書は彼によつて一變したと稱せられる程である。

彼は一四六〇年（天順四）に江蘇省長洲、すなわち蘇州に生れた。字を希哲と稱し、生れた時から右手の指が六本あつたので、みずから枝山、枝指生と稱した。三十三歳で舉人になつたが、ついに進士になれず、五十五歳ではじめて廣東省興寧縣の知縣となり、翌年赴任してよく盜魁を捕え、三十餘邑に警なしと言われた。嘉靖のはじめ應天府（南京）の通判となつたが、半年餘にして病氣と稱して蘇州に歸り、一五二三年（嘉靖二）の春、懷星堂を建て、三年の後（一五二六）ここで歿した。

書は五歳の時からすでに一尺大の字を書き、楷書は李應禎に學び、行事は徐有貞に就き、のち李應禎の女婿となつた。また九歳ですでによく詩をつくり、文章も奇氣あり、筆を持てば泉の如く浮び出る有様であつた。當時の書風といへば、元の趙孟頫の優麗典雅な書が流行し、明初いづれもその傾向をうけついでが、祝允明が現れると、その典型をうちやぶり、直接に王羲之の書法に近づこうとした。しかも王羲之ばかりでなく、いろんな異つた書法をとり入れたという。これには仲間があつた。

すなわち同じ蘇州の出身である文徵明や、唐寅、徐禎卿でありこれを吳中の四歳子と稱し、大いに新風を鼓吹した。ところで彼等が自由に新しい書風を打ち出すようになった地盤はどこにあるか。まず第一には元明以來の蘇州が、經濟・文化の中心として、獨自のものを生み出したことによる。これについては宮崎市定博士が「明代蘇州地方の士大夫と民衆」（史林三七の三）で、興味深く敘述しておられる。しかしなおその上に彼等の活躍した時期、すなわち、成化から弘治・正徳・嘉靖という時代が、やはり舊來の風を破るべき要素を持つていたのではなからうか。祝允明の志怪録には、成化十八年に宦官と妖人が、江南の徵發を行なつたのに對し、蘇州ではげしい抵抗を擧げているが、まさしく成化時代は宦官の横行した時代であり、これが歴史の流れを歪ませて、その最大の被害地ともいふべき江南地域の反撥を昂揚させたと考えられる。

ともあれこの時期に生れた祝允明は、固苦しい禮法にとらわれた士を憎んだ。これは官僚の形式主義に對する反抗であり、彼の内にひそむ獨自の合理主義であり、世間のごまかし、偽善者をにくむ彼の眞實の精神であるといわれる。そのような彼の非なるものへのするどい批判は、彼の文集の中に現れてはいるが、とくに端的に示すものは、祝子罪知録であろう。この書は普通七巻といわれるが、最近ふとした機會に私が偶見した書は十巻に分れ、文徵明の識語、王世貞の校定になる。罪知録とは心を平にして古人の善惡是非を分別したものである。まさに彼の合理主義にもとづいた古人の批判である。たとえば、古の聖人君子に位置する殷の湯王、周の武王を聖人にあらずとなし、

孟軻の性善、荀子の性惡を非として、莊周を孔子に次ぐ第一人者とみる。また宋の趙巨胤・趙匡義を篡賊となし、元朝につかえた學者、許衡・吳澄や、趙孟頫を、忠の蝨、孝の螟と論斷する。

ところで彼の佛教への論は、全集にも散見するが、とくに興味深いものは、同じく罪知録の中にある論釋なる一章である。これは論釋とはいうが、實は佛教と儒教・道教が究極に於ては一致するという、いわゆる三教融合の立場を示したもので、そのなかばを宋代の儒學者張橫渠や、朱子らの佛教批判に對する反論についやし、いわば金の李屏山の鳴道集説などとよく似たものである。とくに朱子に對して、「我が佛法をもつて儒法用のとなし、功を己れに歸し、身を轉じて佛を排する」者となしまた儒家より佛教批判の焦點となつた寂滅ということについては、「人死して即ち滅し、また輪廻再生なしという理は、聖人の意にあらず」といい、「比丘が俗を出て煩惱を斷つことは、小乗の法であつて大乘ではさにあらず、佛教は國王より大臣長者居士に至るまで、すべて一切善法をとき、究竟は皆如來の地に至らしむるものであつて、ただ出家一門の至るものとなすにあらず、したがつて何ぞ儒者の譏を待たんや」という。

さらに彼の見解を検討すると、實は一つの據り所があることがわかる。すなわち同じ江蘇省の鎮江縣の沙門景隆が著した尙直編に負う所が甚だ大きいのである。尙直編とは一四四〇年、(正統五)、祝允明の生れる二十年前に書かれたものであり、祝允明は論釋の中で、尙直編の章句をかなり多く借つて來ているのである。そして彼の三教についての考え方は、同時代の學者

浙江餘姚の王陽明とも全く無關係とは言い得ないであらうし、さらに李卓吾や屠隆に祝允明の論釋が影響を及ぼしたということとは、當然考えられることである。ともかく祝允明がその時代の流れにあつて、大きな、役割を果していたことは否定できない。

ストア思想の特質

坂本 弘

ストア思想の特質を理解するためには、まずその成立の歴史的背景に目を向けることが必要である。當時のギリシアはアレクサンドロス遠征の後につづく變動の時代にあたり、測りがたい明日への危懼、運命への不安、が重苦しく垂れこめていた。他方、傳統的な世界觀も倫理的規範もすでにそのポリスの基礎を失い、民衆の精神的支柱としての實を有しなかつた。したがつて民衆は、このような不安と懷疑の中にあつてなお生き抜く支えとなるような時機相應の世界觀と實踐的規範とを模索しつつあつたのである。彼等の求めたのは、知を愛する心に呼びかける哲學であるよりは、生の支えとなり存在のよりどころとなる教えであつた。

ストア哲學の創始者ゼノン (キェプロスの Zenon 335-263 BC) がアテナイにおいて提唱したのは、まさしくそのような教えであつた。そしてその教えは本質において意志の教えであつたということができよう。このことは、ひとりゼノンのみならず、以後のストア思想の、全系列についていいうることであ